

# 展示室の柔軟性

— 金沢21世紀美術館の試み —

展示会開催ごとに、使用する展示室を自由に組み合わせ、限らない可能性を引き出す  
金沢21世紀美術館。  
その名にふさわしく、21世紀の新しい試みに挑むすがたを紹介したい。

鷺田 めるろ  
(わした めるろ)

金沢21世紀美術館キュレーター



金沢21世紀美術館外観



## 可動壁を無くす

金沢21世紀美術館の建物を設計する際、柔軟な空間構成の実現は重要な課題であった。それは観客の動きの自由度を高めること、展示会ことの展示室の組み合わせの柔軟性にわけられる。

従来の美術館が、ひとつの正面入り口と、ひとつの順路に沿って展示室を巡る空間構成をもつものに対し、金沢21世紀美術館は、五カ所の入り口をもち、都市を歩き回るようにさまざまな経路をとることができ(図1)。この建物は、自ら選び、探すという観客の能動的な行為を引き出す空間構成をもつといえる。これが観客の動きの自由度を高めるのであり、この点については、これまでも設

計にかかわった学芸員としての立場からさまざまな機会に触れてきた。ここでは、展示室の組み合わせの柔軟性について、開館後約二年間に建物を使った結果の一部を報告したい。

展示室の設計では、可動壁を用いないことを当初から目指していた。可動壁とは、天井から吊り下がる壁を移動させることで、展示会ごとに空間を仕切るシステムである。金沢21世紀美術館で可動壁を避けた理由のひとつは、自然光が十分に入る天井の高い空間を作るためであった。すなわち、外の空間との繋がりを展示室のなかにも感じられるような、開放感をもたせるためである。そのためには天井の構造が大仰かつ複雑になり、天井高にも限界のある可動壁を避ける必要があった。ま

た、それぞれの空間に独立性と完結性を追求したことも理由のひとつである。映像作品など音を伴う作品、部屋全体の空間を使った作品の増加がその背景にあるが、一方、展示室以外での展示が一般化するなかで、あえて作る展示室ではシンプルなものホワイトキューブの完成度を高めたいという意図もあった。

可動壁を使わずに、空間の多様性を確保するためには、あらかじめさまざまな大きさやプロポーションをもった空間を用意する必要がある。なおかつ、それらがさまざまな組み合わせを可能とする配置になっていなければならない。そこで、各展示室が廊下を挟んで互いに離れて配置されることになった。設計段階では、「企画展示室」常設展示

室」という名称で区別していたが、最終的にその区別も無くし、「展示室1〜14」という通し番号をつけた。

## 展示会ごとの組み合わせ

二〇〇四年一〇月に開館してから、本稿執筆時の二〇〇六年八月において、約二年近く経った。その間にこの一四の展示室を会場として金沢21世紀美術館が主催したおもな企画展は八本だが、毎回、使用する展示室は少しずつ異なっている。開館記念展「21世紀の出会い、共鳴、ここ、から」(以下「開館展」)と「Alternative Paradise: もうひとつの楽園」展では、すべての展示室1は使用しなかった。「世界の美術館: 未来への架け橋」展と「妹島和世 十西沢立衛 / SANA A」展(以下「SANA A展」)では、前者が展示室7、12および14を使用し、後者が展示室2、6および13を使用した。マシュー・パニーニ「拘束のドローイング」展(以下「パニーニ展」)は、展示室1、5、12、14を使用し、続く「ゲルハルト・リヒター: 鏡の絵画」展(以下「リヒター展」)では展示室7、12、14を用いたが、この二本の展示会と同時に、コレクションからのテーマ展「アナザー・ストーリー」展がおこなわれた。パニーニ展とリヒター展で使用する展示室が異なっていたため、「アナザー・ストーリー」展は、パニーニ展からリヒター展への展示替えに際して、展示室1、5、6が付け加わることになった。人間は自由なんだから: ゲント現代美術館「コレクションより」展では、リヒター展と同じ展示室7、12、14が用いられた。このように、毎回さまざまな組み合わせ方がとられた。

## 設計者自身による使用例

そのなかで本稿では、SANA A展を例に、展示室の組み合わせの一例を具体的に紹介したい。SANA A展を例にするのは、この展示会が設計者自身の個展であったため、どの展示室をどのような組み合わせで使うのかに関する、設計者の考え方も反映されたからである。

美術館「展は、スイスのパーセル・アート・センターで企画された美術館建築の国際巡回展である。二五の美術館建築を模型やパネルなどで紹介するものだが、国内巡回にあたって、日本人建築家による四件の美術館建築を紹介する「日本から未来へ: Museums by Japanese Architects」という展示が追加された。SANA A展と「世界の美術館」展は、初めてふたつの展示会を同時期に開催する機会であった。



(図1) 金沢21世紀美術館平面図

表紙モノ語り

夜這い棒

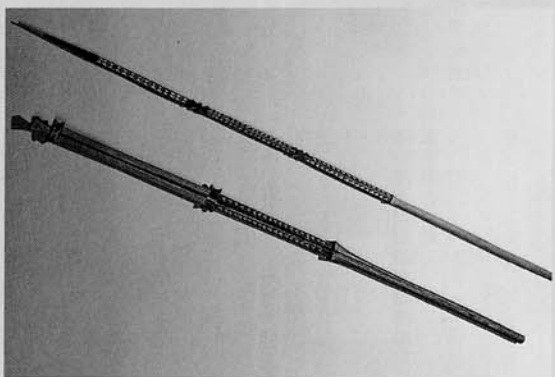
よばい棒(標本番号K5872(上)K413(下)) カロリン諸島のチューク諸島

須藤 健一 (すどう けんいち)

神戸大学教授

トラック(現チューク)の若者は生業活動を年配者に任せ、戦い、航海、性などの知識の習得に専念し、「男らしく」振舞うことが期待されてきた。性知識として、恋心を相手に伝える伝統的な手法は「夜這い棒」と「ほれ葉」である。男性は精魂込めて自分のデザインを棒に刻み、夜這い棒を作った。

男性はこの棒をもち歩き、意中の女性に出会うと棒の刻みを見せびらかし、また触れてもらう。その効果は夜にあらわれる。男性は夜這い棒を肩にお目当ての女性宅へ出かける。彼女が家のどこに寝ているかは予想がつく。家屋はヤシの葉葺きの屋根と壁で、男性は壁越しに夜這い棒の先を差し入れ、彼女の髪の毛にまきつける。彼女はその棒に手をやり、彫刻で相手が誰かを知る。お気に入りだと、棒を二回引く。「どうぞ家の



なかに入りなさい」という合図。もしくは一回引いて一回押すと「私が外へ出てゆく」という意味である。関心のないやつには二回とも押し返す。間違つて母親を起こして、「盗人」と騒がれて面目をつぶす、間抜けな男性もいた。

家屋は木造やコンクリート製へと変わり、夜這い棒の効力はうせた。それでも、若者は手紙や電話ではなく、窓から注射器で水を覆っている彼女の顔面直撃という手荒なやり方など、夜這い棒のかわりにしている。一方、芳香性の植物や樹液を何種類も調合した秘伝の「ほれ葉」(トラックの香水)は、今でも健在である。

最近、携帯電話がはやりました。トラックの若者が、携帯電話の威力を愛の伝達の伝統と組み合わせ、どんな新しい「性文化」を作り出すか楽しみである。



SANAA 展展示風景

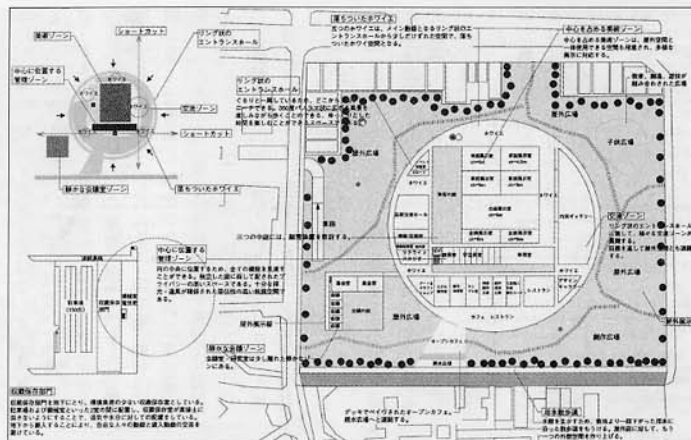
ケットの発券場所からSANAA展の入り口がわかりにくいということが反省点として残った。その後の展覧会では、チケットの発券場所に近い三カ所が展覧会の入り口として定着しつつある。また、無料ゾーンの開場時間は九時から二二時、有料ゾーンの開場時間は一〇時から一八時と異なっているが、有料ゾーン内で無料で開放した中央の通路は、有料ゾーンの開場時間しか開放されないため、館内サインやパンフレットなど印刷物との整合性をとるのが難しいという課題も残った。柔軟な空間構成の実現には、空間のみならず、発券システム、サイン、印刷物など

インターフェースとの連携も重要であることを感じた。さらに、SANAA展の会場であった展示室6にレランド口、エルリッヒの常設作品《スイミング・プール》への入り口があるが、この作品のみ見たいという来館者も多い。この展示室を入場料金の高い企画展示に使いにくいことも考慮に入れる必要がある。

こうした制約を考え合わせながら、いかに建物の可能性を引き出し、柔軟に空間を使うことができるかを今後も試みてゆきたい。それと同時に、課題となる点を検証してゆくことで今後の美術館建築の設計に役立てられればと思う。

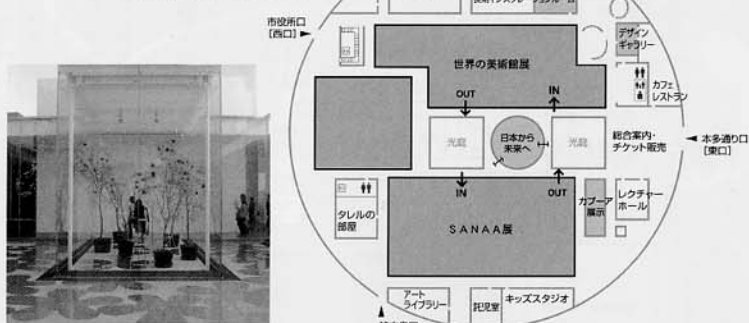
まず、美術館側からSANAAに対し、有料ゾーンを横切るように無料の通路を作ることを提案した。これは、コンペ時のプロポーザル案が、円形の建物の中央を横切つて通り抜けられる計画になつており(図2)、また、基本設計段階でのさまざまな検討案のなかでも、通り抜けられる通路がある案が挙がっていたためである。通り抜けられるようにすることで、建物のなかを歩き回る来館者の流動性を高めたいと考えた。

一方で、天井高が高く自然光の入る展示室6と11を使いたいという提案がSANAA側からあった。これらの部屋は、それぞれ天井高が二メートルと九メートルあり、それまでの美術館建築にはめずらしいサイズの部屋である。だが、このふたつの展示室は、離れた場所にあった。展示室を小さくしていくときのリズムを考え、大きな展示室と小さな展示室が比較的交流にあることを考慮したためである。これらの展示室を組み合わせることは、全



(図2) SANAAによるコンペ時のプロポーザル案

(図3) 「世界の美術館」展、SANAA展開催時の展示室の組み合わせ



SANAA 展展示風景



金沢21世紀美術館廊下

部で五、六室程度の規模の展覧会では難しかったため、展示室6を選び、中央の通路を無料ゾーンとして開放することになった。また、中央の通路の部分にある円形の展示室14は、「世界の美術館展」の日本追加展示「日本から未来へ」に使用することになった。ここで展示された四館のなかには、金沢21世紀美術館も含まれており、空間的な配置においても、世界の美術館展とSANAA展をつなぐこととなった。この展示部分は、無料で入場できるようにした。さらに、アニッシュ・カプアアの常設作品《世界の起源》の隣にある展示室11は、コレクションよりカプアアの作品を展示し、この二部屋も入場無料とした。このようにして、SANAA展開催時は、有料ゾーンが三つのエリアに分かれることとなった(図3)。

設計への貢献目指し

このようなエリアわけで開催した結果、各エリアでのまとまりはよかつたが、一カ所しかない手